

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第475号 平成25年1月18日

ノマド

最近「ノマドワーカー」という言葉が流行っているようです。

「ノマド」というのは、「NOMAD」即ち「遊牧民」という意味で、「ノマドワーカー」といえば会社といった組織に縛られず自由に働く人をいい、「ノマドライフ」といえば何ものにも囚われず自由に生きる人の事をいいます。

「自由（フリー）」という言葉に憧れを感じる人は、少なくありません。

「フリーランスの教科書」の著者はこういいます。「なるべく自分の好きな仕事だけをやっていきたい。時間に追われずマイペースで働きたい。自分の可能性を試したい……。なんてったって「フリー」って響きが好き。」

これに対して、人材育成コンサルタントの松本幸夫氏は「フリーランス」「ノマドワーカー」という言葉について「納得しないと動かない症候群の若者の琴線に触れること間違いなしの、魅力的な言葉です。何となく新しくて言葉の響きもカッコイイ。なんといってもその自由なスタイルがいい。自分の才能一つで納得できないものは避け、納得できるものだけ選んで生きていける。そんな幻想を抱かせます（同氏著「納得しないと動かない症候群」から。）」と述べて、「ノマド」という言葉が持っている問題を指摘しています。

勿論、「フリー」とか「ノマド」という言葉に、安易に憧れている若者ばかりではありません。

「ノマドライフ」を自ら実践している慶応大学の学生、仲川孔望君は「東日本大震災を経験した僕たちは、働き方、生き方について根本的に見つめ直そうという意識が高まっている。今までは一生の生活を支える「安心」の代名詞だったマイホームが、「土地と会社に縛られる」代名詞へと変化しつつあるのだ。（彼のブログから）」と述べているように、若者達の中に「ノマド」という考え方が受け入れられる背景の一つに、3・11以後の価値観の転換がある事を示唆しています。

本田直之氏は「ノマドライフ」という著書の中で「仕事と遊びの垣根のない、世界中どこでも収入を得られるノマドビジネスを構築し、2カ所以上を移動しながら、快適な場所で生活と仕事をする事で、クリエイティブや効率性、思考の柔軟性が向上し、それがいいスパイラルになるライフスタイル」を「ノマドライフ」というとしています。

彼はその著書をハワイで執筆するといったように、まさに「ノマドライフ」の成功者に違いありません。また彼は、その著書で「ノマドライフ」の素晴らしさと共に、それを手に入れる為のノウハウを示していますが、実際に「ノマドライフ」の成功者になれるのは、松本幸夫氏が危惧するように「強い意志とコミュニケーション能力、1人でも闘えるスキルやキャリアを有する人に過ぎず、そのような力のない人が「ノマド」に憧れても野垂れ死にするだけ（前述「納得しないと動かない症候群」から）」という恐れは十二分にあります。

「ノマド」という言葉自体は、黒川紀章氏が今から20年以上も前に「ノマドの時代」を上梓しているように、それ程新しいものではありません。

改めて「ノマド」という洒落た言葉を使わなくても、昔から脱サラして自分で事業を始めるといふ人は少なからずいましたし、「フリーター」も特定の組織に縛られていないという意味では「ノマドワーカー」という事になります。しかし、「フリーター」は身分保障がある訳でもありませんから、浮ついた気分で「ノマド」を選択すべきではありません。

「フリーランスの教科書」の著者も述べているように「独立して初めてわかったことだが、サラリーマンは意外と恵まれている。」というのは、本音だと思います。

日本経済新聞（平成24年9月2日付）が、日本では何故「ノマド」あるいは「ノマド的」なものが繰り返しブームになるのかについて面白い事をいっています。

それは、「逆説的かも知れないが、日本が極めて安定的な社会だったから」というもので、一度企業に入ってしまうと定年まで安定が保証されますが、一方では、安定と引き換えに自由を差し出さねばならず、この為に、しばしば「自由な働き方」を求める議論が起きるといふものです。

ところが、日本の現状は、年功序列や終身雇用といったものはとうの昔に崩壊し、一方では非正規雇用が増え続け、既に労働者の35%を超えるまでになっています。こうした中で、人々は望むと否とにかかわらず、「ノマド」あるいは「ノマド的」な選択をせざるを得ない状況が生まれて来ています。

してみると「ノマド」は、今や個人の選択の問題を超えた、社会全体の変革のエネルギーを内包しているうねりの様なものかも知れません。（塾頭：吉田 洋一）